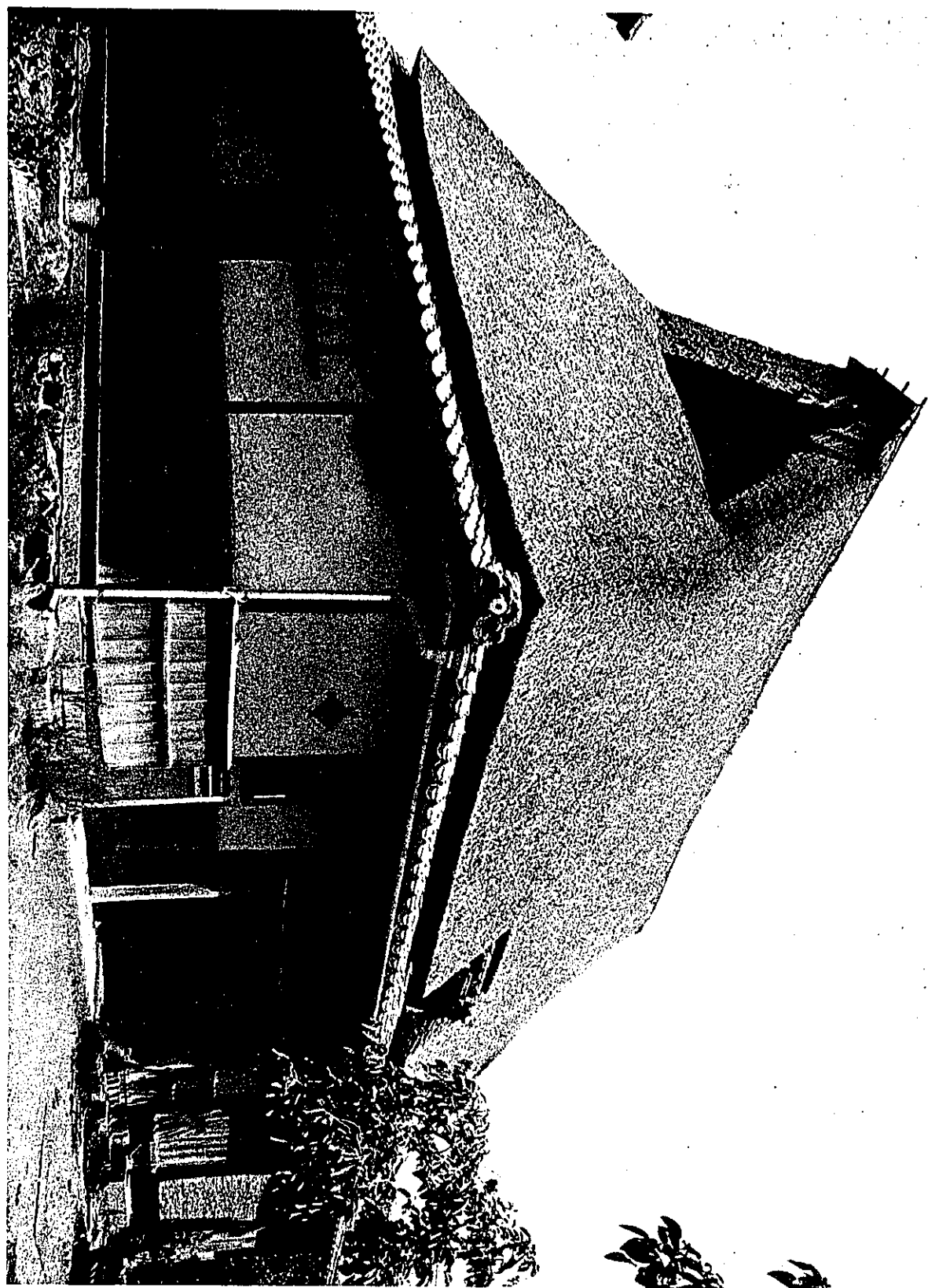
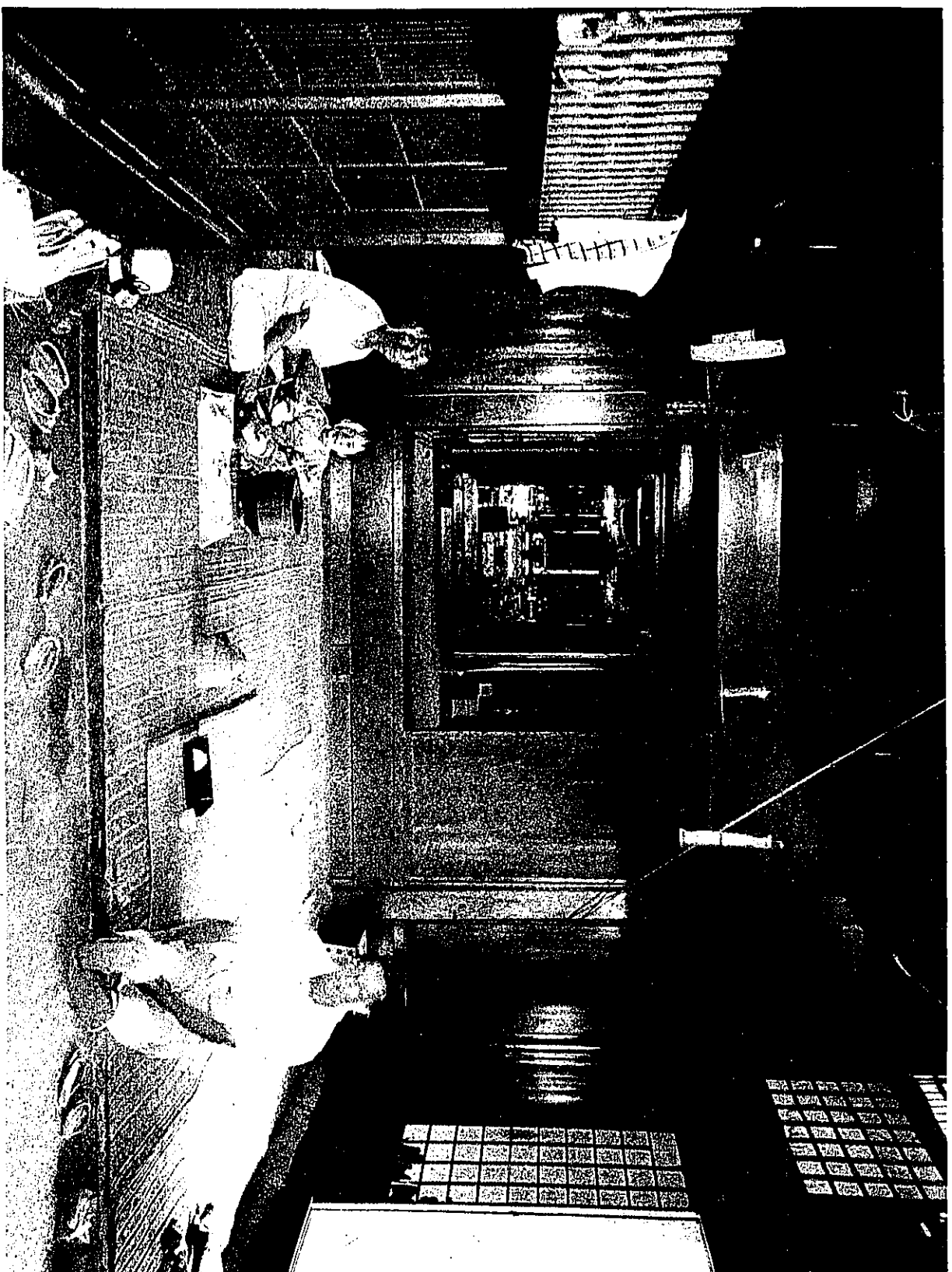
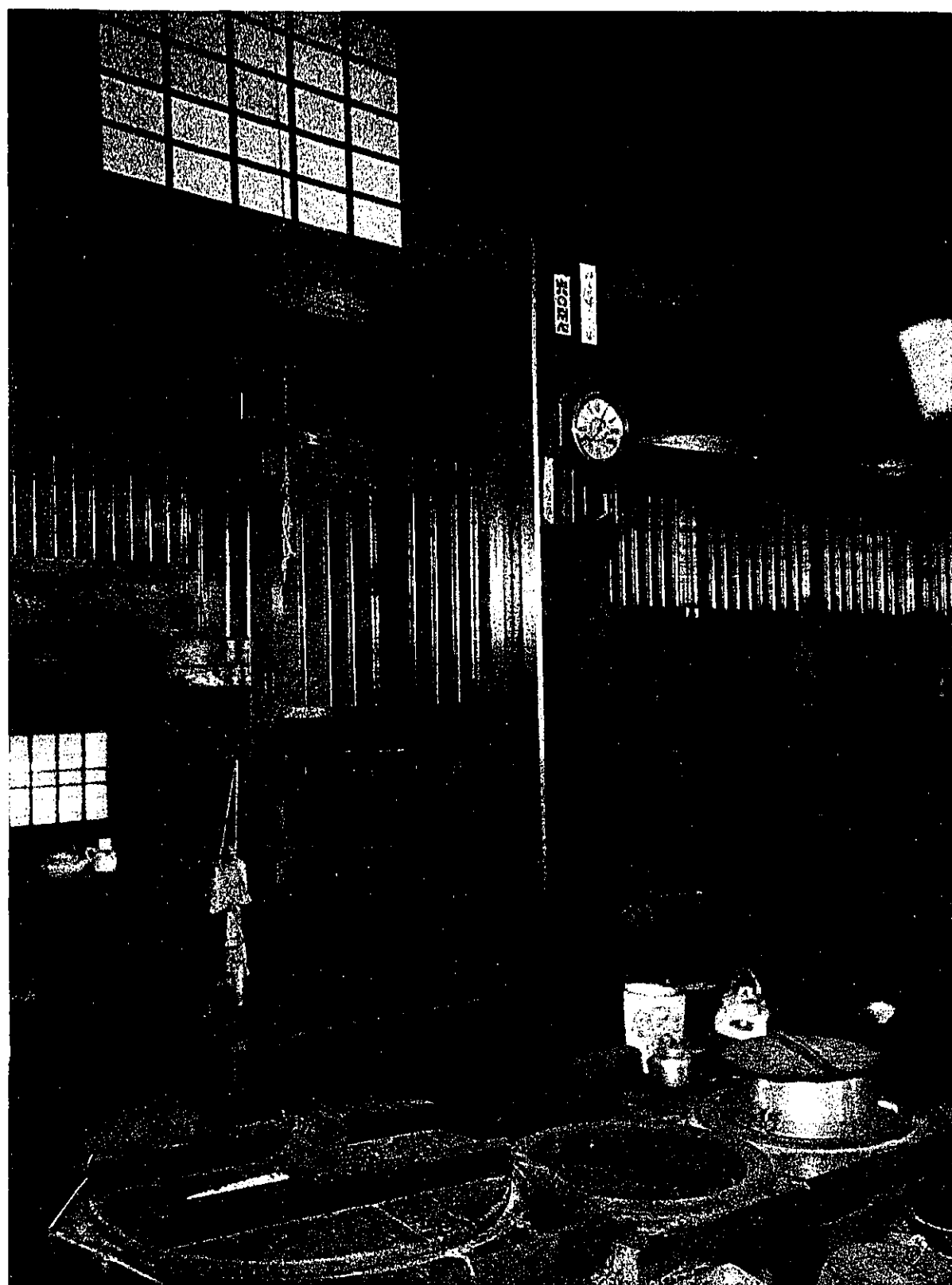




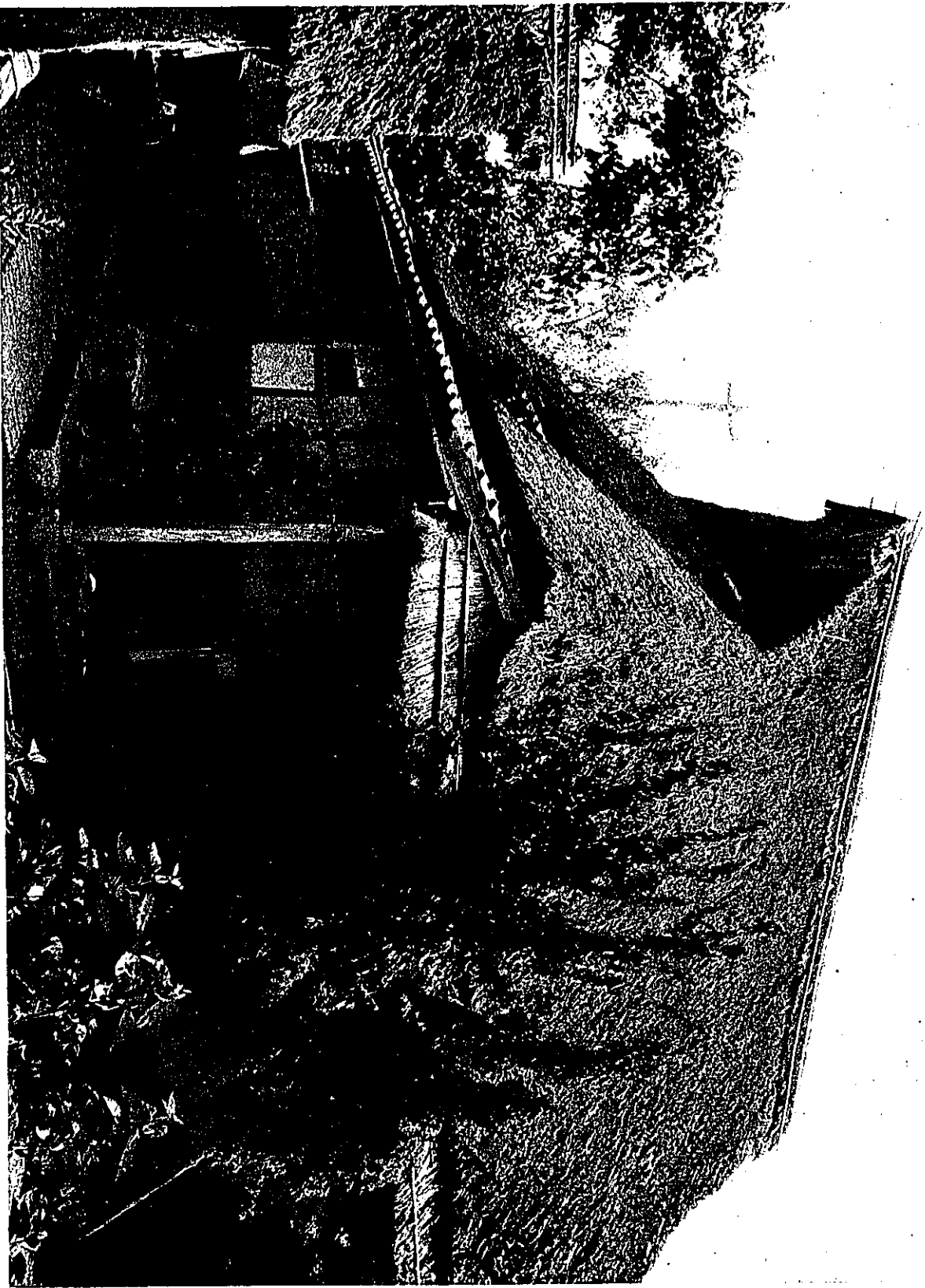
吉保利村 大智恵太夫氏 8



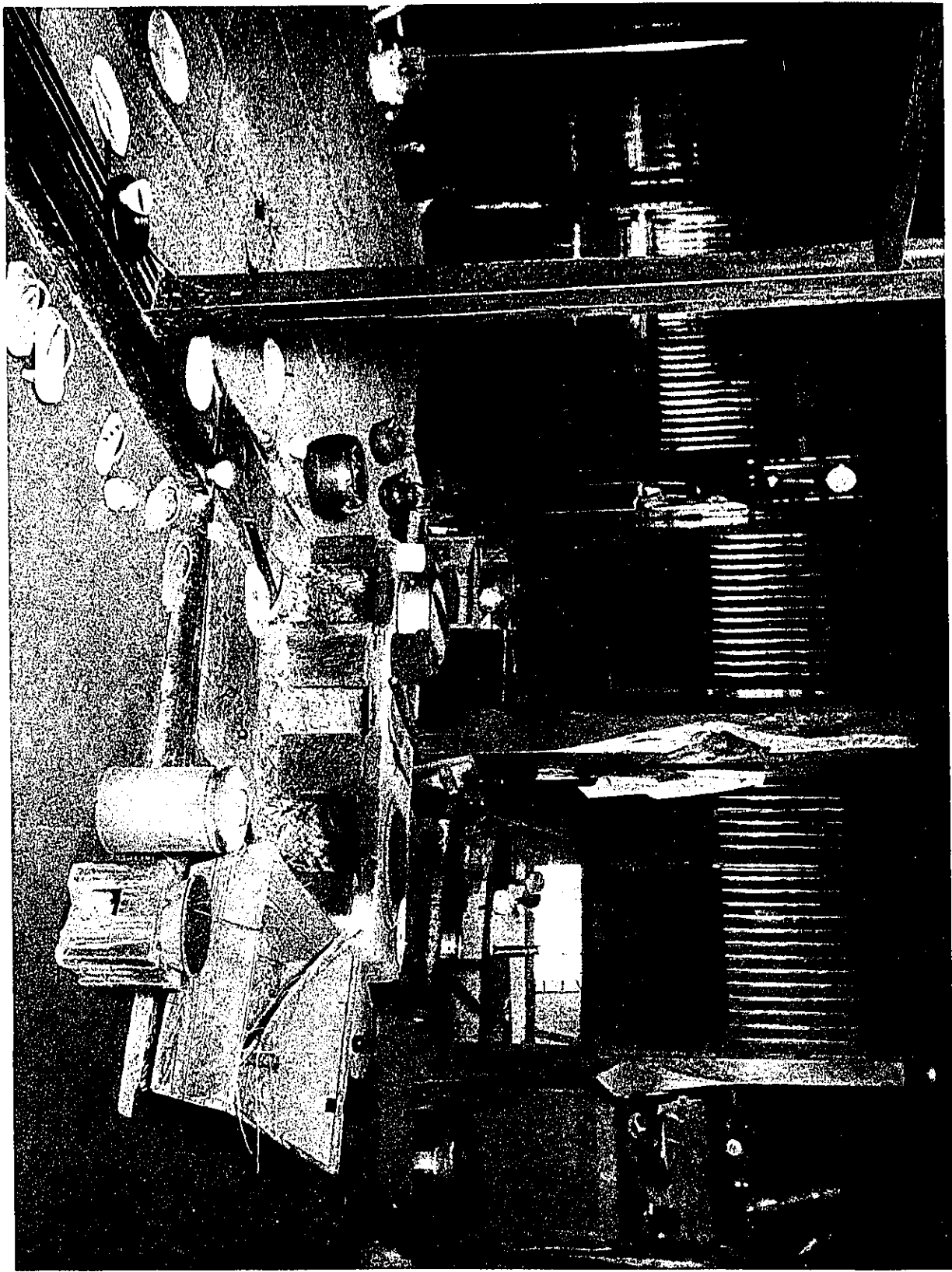
古堡利村 大香忠太夫氏 9



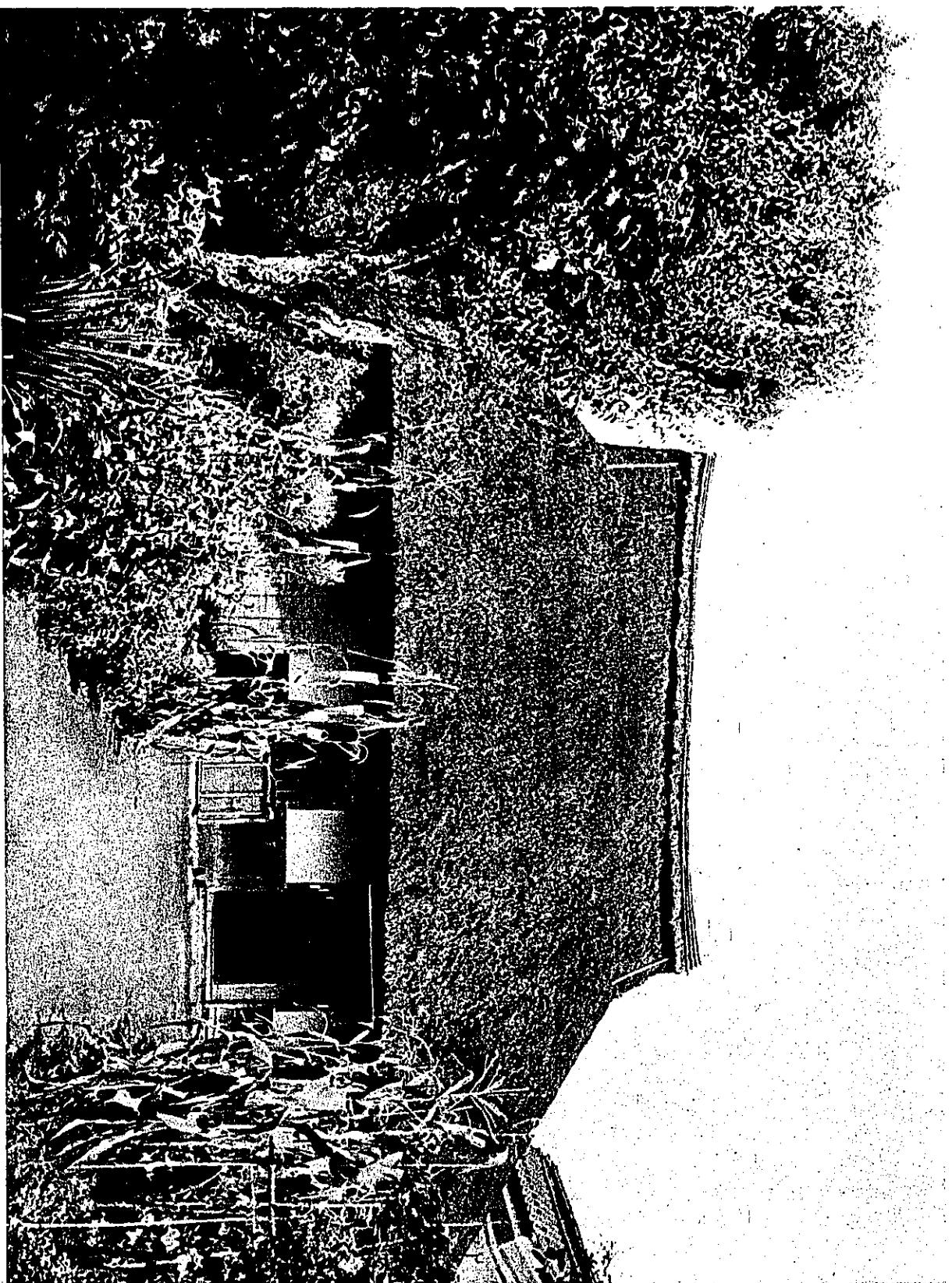
古保利村 大智忠太夫氏



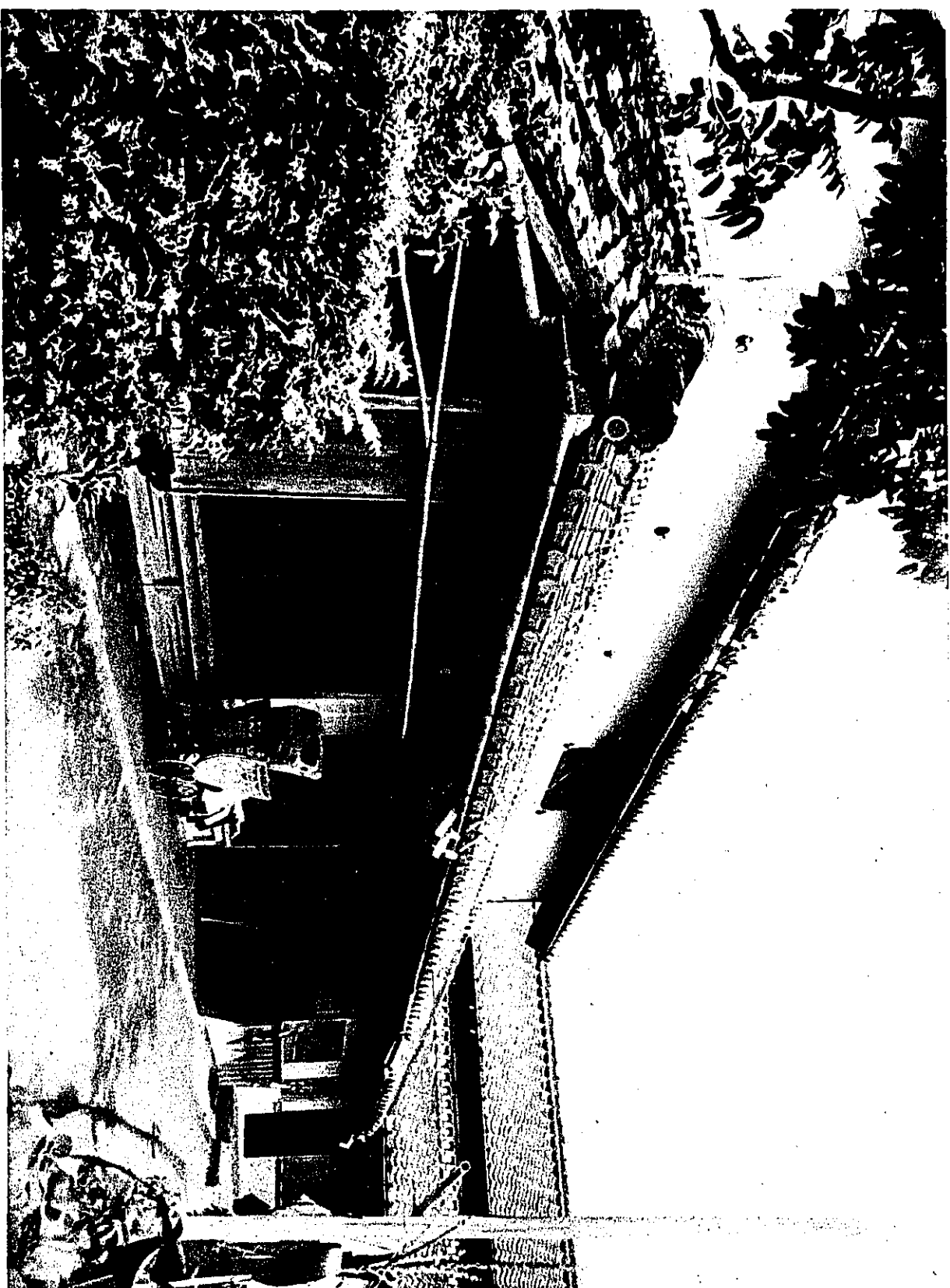
古保利村 大音政五郎氏 11



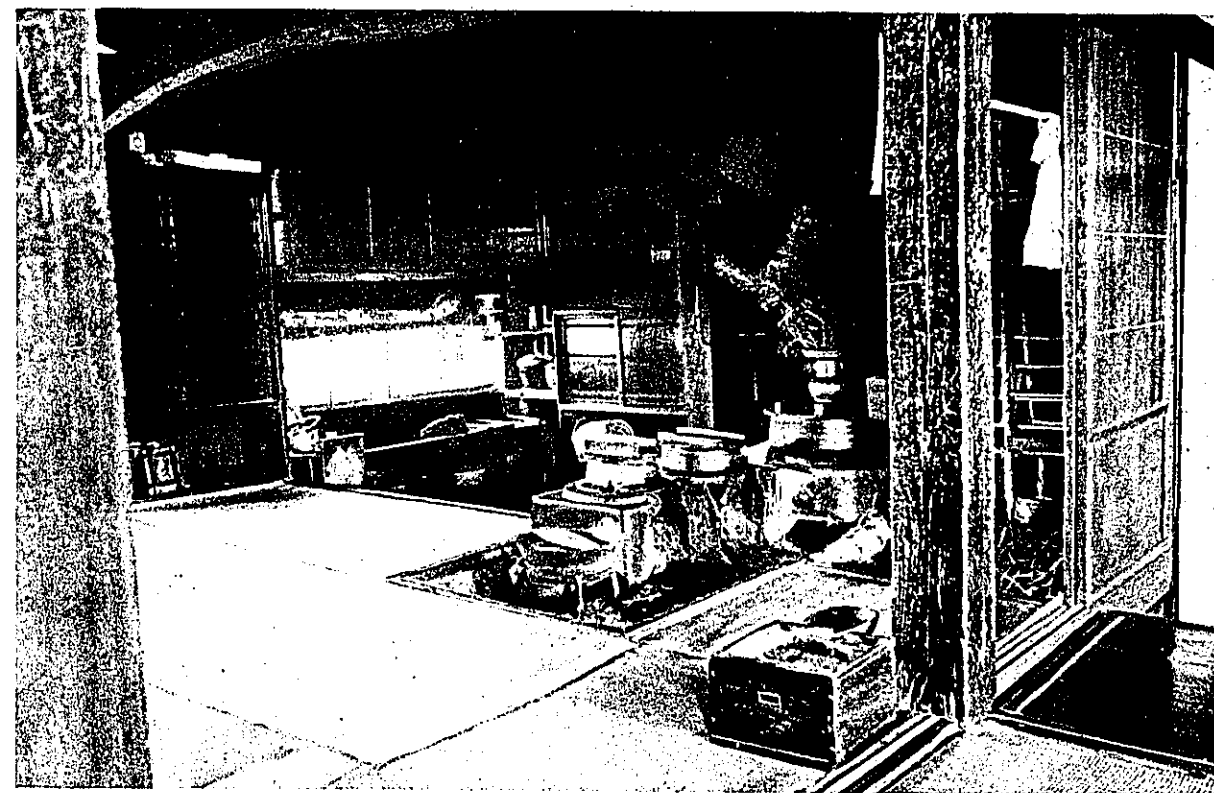
古保利村 大曾政五郎氏 12



多賀村 樋口利八氏 13



大原村 大原兵馬氏 14

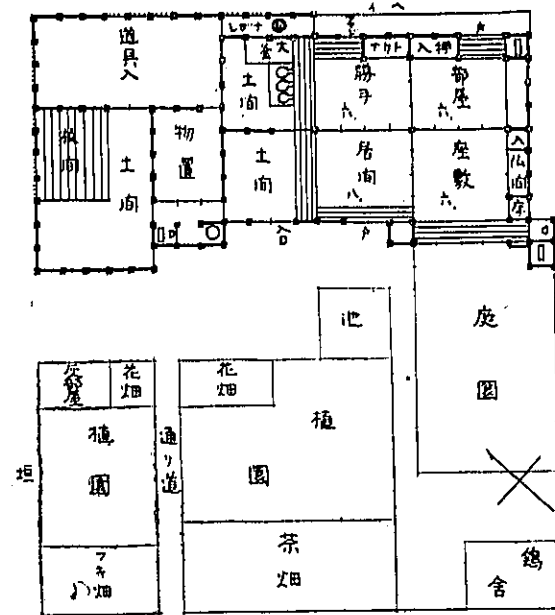


大原村 渡邊國藏氏
15

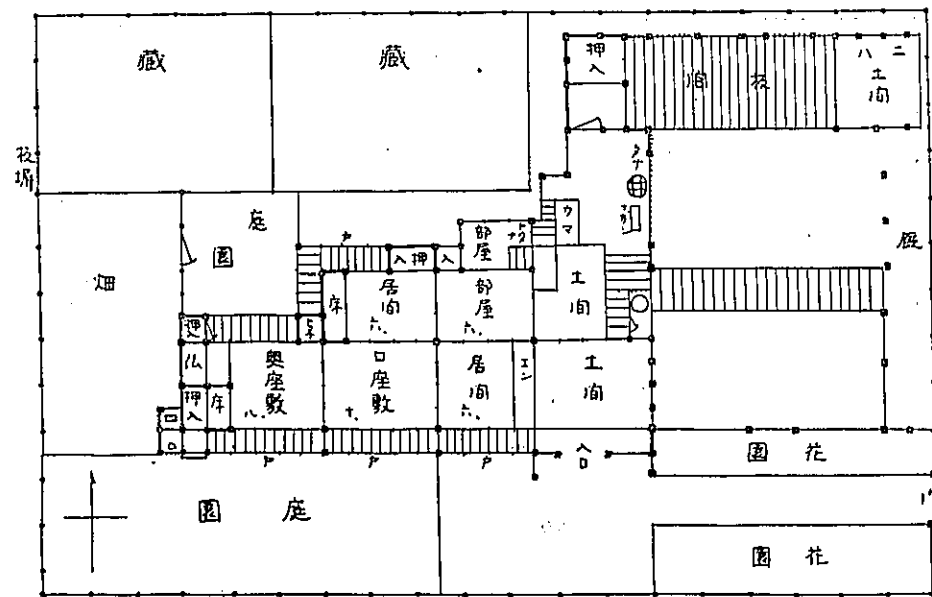
縣下の概観

本縣は伊香郡、坂田郡、高島郡等琵琶湖の北部に接した地方は福井縣と同じく小間入り造りに屬して居るが、東は米原附近から南にかけて南の半分は平入りの整型又は喰違型の間取になつて居る。小間入りの所でも近江ではオイエと曰ふ名稱を用ゐず臺所と稱してゐる。又臺所に床を張らずにヌカに蓆を敷いたものを入地臺所と呼んで居る。福井縣では此の臺所の一部に土間を取つたものが多かつたが近江では臺所の前に更にニワの土間があつて、臺所とニワとが前後に隣つて居る。入地臺所になつて居る場合には分木と稱する角材が仕切に横つて居るのみで、建具等の仕切は無い。又床張の臺所の一方に狭い茶間を作つたものがあるが、一般に建具で仕切らない様である。此の場合臺所の方が茶間よりも廣くなつて居るから、四室の喰違の型式になつて居る。又整型四間取に仕切つた例は最も多く、是れは小間入り（即ち妻入り）と大間入り（即ち平入り）とに關らず何れも大多數を占めて居る。同じ整型四間取でも、福井縣と近江では稍趣を異にして居る。福井縣では中柱の奥に四間取があつて、その前に板の間の臺所があり、その一部にニワがあるが、近江では中柱の前の臺所が左右に建具で仕切られて、その前に更にニワがある（第二圖參照）。臺所とニワとの境に大黒柱があるものが多い。尤も此の大黒柱は臺所と勝手との中央の仕切の所に一本あるものと、中央に仕切のない入地臺所の場合には中央の柱を除く爲めに左右に離して二本柱を建てるものがある（第一圖參照）。更に大きい間取になると、中柱の奥が四室と、前が二室併せて六室の整型の間取になつて居る。整型の四間取及び六間取共に、小間入りも、大間入りも同様の型式であるが、大間入りの場合にはニワを中央で前後に仕切るものが多く、又その下手の方に物置や仕事部屋等を設けるものがある。

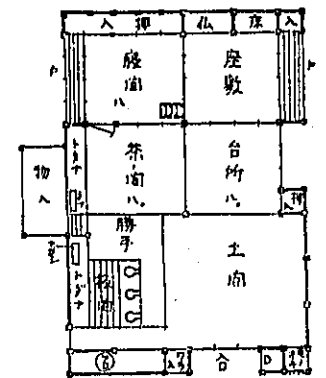
構造は伊香郡地方は福井縣と同じく素屋建と本屋作りとあり、本屋作りは眞屋作りと全く同様であるが、入地臺所の前に更に土間がある爲めに、臺所と土間の境に大黒、エビスの兩柱があつて、中央に柱がなく、此の部分を廣く使



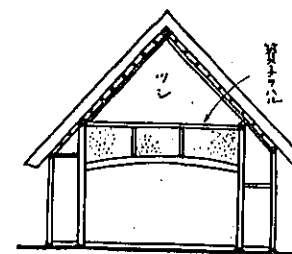
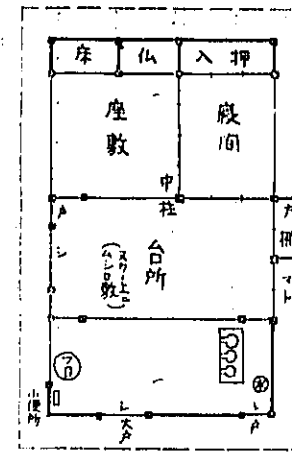
(2×2) 型 整 (四)
(村庄ヶ五南郡崎神)



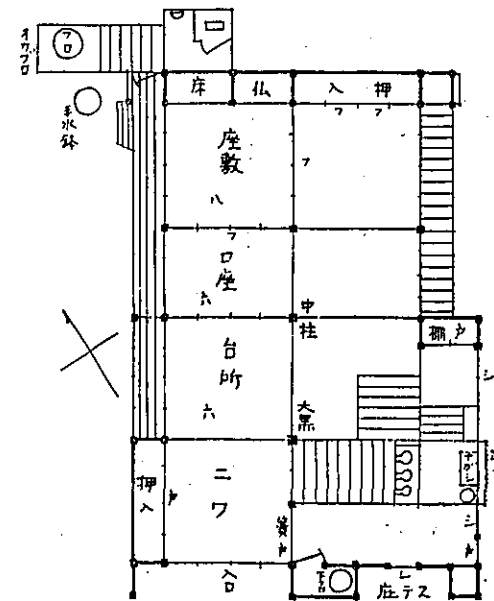
(1+2×2) 型 整 (五)
(村長息郡田坂)



(リ入間小) 型 整 (二)
(村利保古郡香伊)



(リ入間小) 型 原 (一)
(村吹伊郡田坂)



(3×2リ入間小) 型 整 (三)
(村吹伊郡田坂)

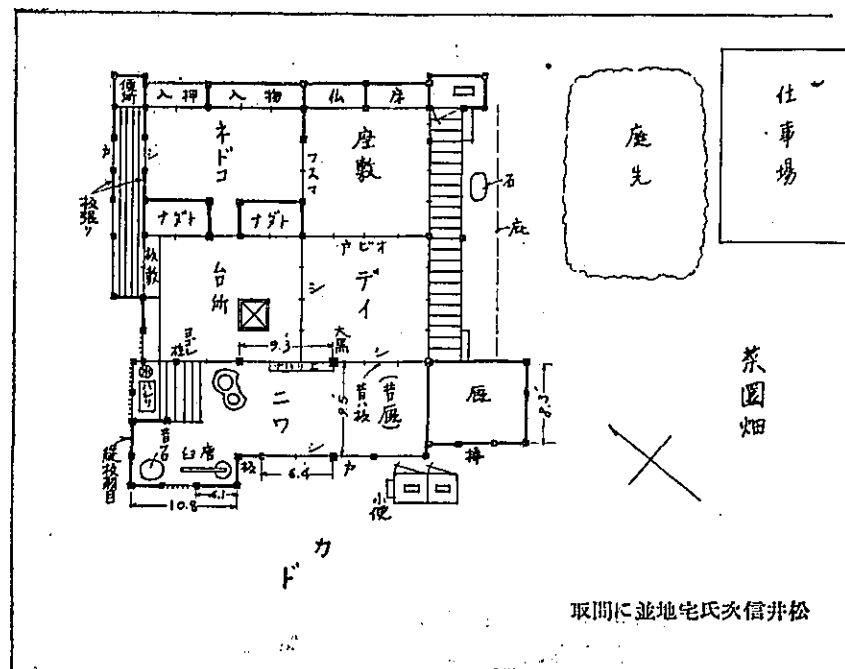
ふ様に工夫されて居るのである。此の様な構造を鳥居建と稱して居るものがある(第一圖参照)。
南方地方では平地には一般に整型が多數を占めて居るが國の境に近い山地に入ると古い縦の喰違型の間取が可なり多く残存して居る。是れは坂田郡の敏満寺の例(圖版第十三)や、甲賀郡大原村の例(圖版第十四)等に現れて居る通りである。此の様な間取は大阪府の例でも述べた通り古い形式が残つてゐるものである。

圖版説明

圖版第六 琵琶湖の西北高島郡今津町宇蘭生^{ユラン}の部落景観である。此の部落は若狭街道に沿って居る一種の菟村^{ウサキ}の状態をなして、家と家とが相當に離れて建てられ、然かも數十戸の塊をして居る。家は大間入りが多いが、小間入りも少数は見られた。母屋の前庭の横に必ず葦葺切妻の大便所が建つて居るが入口には簾を二枚垂れ、妻の板壁の下に土臺の曲木の下に汲取口が付いて居るのが目立つ。

圖版第七 高島郡三谷村松井信次氏の宅であるが、此の部落は若狭街道の國境近き山村で部落の家は小間入りの家が多い数である。此の家は三百年以前の建築で四間取の規則正しい形をして居て、中柱の奥に座敷と寢床があり、前にデイと臺所がある。ニワの上り端の兩端に柱があり、右の方を大黒柱と稱して居るが、デイと臺所の仕切の所には柱がない。ニワの右側に廊が建増されて居るが昔はデイの前にあつたものだったそうである。

屋根は最も單純な形をして大屋根を四方に葺下して瓦葺の下屋などを葺下してないのは昔の面影を存して居る。柱が高くツシの下に五尺八寸の中二階があつて藁入れになつて居る。



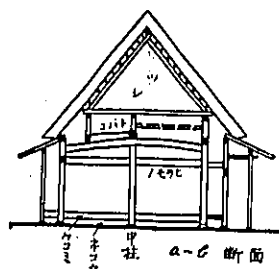
取間に並地宅氏次信井松

る。

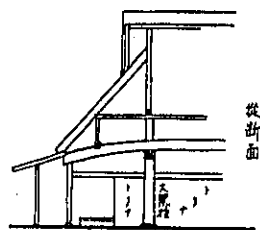
圖版第八、第九、第十 琵琶湖北伊香郡は福井縣下越前に接して、一帯に小間入りの住家の特徴が明に見られる。此の家は湖に沿ふた古保利村宇柳野の部落の大音忠太夫氏宅であるが間取は本縣の概観で説明した通り中柱の奥に座敷と寢間があり、その前に入地臺所があつて入口のニワと分木で仕切られて居る。此の家は大間入りになつて小間には間口三尺の入口が一つある丈けになつて居るが、間取の形式及び内部は全然此の地方の小間入りの形式になつて居る。

此の事は次の圖版第十一の大音政五郎氏の宅と比較して見るとよく解るであらう。入地を板間にしたものを上間臺所と云ふて居る。更に此の上間臺所を二つに仕切ると四間取となるわけである。然し此の部落では一般に臺所は板間でも一段低くなつて居るので是れを間敷に入れず、中柱の上が四室になつたものを四間作りと稱して居る。此の部落で内藤長太夫氏の宅などはそうなつて居るが、昔は臺所がやはり粗糠に藁を敷いたものであつたのを改造したものさうである。

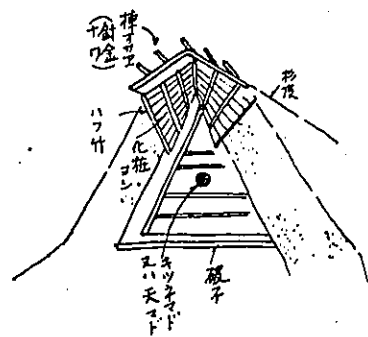
此の部落の家は一般に小間入りでも大間入りでも座敷の椽が南向きになる様に、即ち大間が南向きになつて居るが、然し山村の方の部落は小間が南を向き、座敷と寢間は夫々東西向きになつて居るものが多い。此の方が小間入り作りの古い形態であらうと思ふ。伊吹山麓伊吹村で調査した處によると土地の人は斯う曰つて居る。小間入りは南向きになると東西から太陽が當るので屋根の持ちが良い。若し南向きの平入りになると屋根の北側の持ちが倍違ふ。然し此の頃の新しい家は瓦葺になり、且つ見場がよいからと云ふので平入りにするそうである。



圖面斷横び及取間宅氏太忠音大



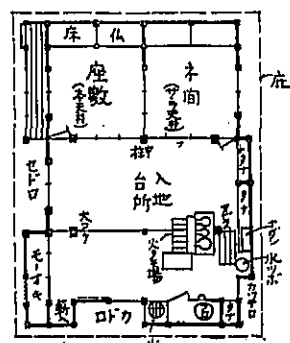
此の附近では棟の下には大きな牛(梁)を用いて居る。本縣概観挿繪にある伊夫伎氏の家は長さ八間の松の太い牛を用いて居る。此の様な大きなものを建前の前に上げるものは大事らしい。柱間には三種ある。田舎間は内法三尺、合ノ間内法六尺一寸五分、京間は六尺三寸になつて居る。圖版第八は大音忠太夫氏宅の母屋の全景であるが、白漆喰塗壁と腰の下見板、入口の庇、直線的に葺下した入母屋の屋根等此の湖畔の部落らしい特性を見せて居る。此の屋根は全部葺いて茅を用ゐて居らぬさうである。



圖版第九は臺所の内部であるが、欄間の上の小窓は屋根の煙出から採光する様になつて居る。座敷の正面に排煙が飾つてあり、臺所は天井がなくツシ迄高く見える。その下には牛、桁、梁などの構造が見えて氣持ちがよい。分木で仕切られた臺所、ニワと釜、ドとの仕切の衝立障子などの有様がよく解る。此の家では竈のことを釜ドと云つて居る。

圖版第十は此の地方の所謂釜ドと戸棚及び流しの様子であるが、正面の柱を大黒と曰ひ、是れに對して入口に近いものをエビスと曰つて居る。是れで見ゆる通り大黒柱の外に下を葺下して是れに戸棚を作付けにしてある。

此の附近の土藏には蒸籠造りはないが、土藏の内部は柱間にハサ板と云ふ板厚一寸位の横板を柱間の側に溝を突き是れに嵌めてゐる。



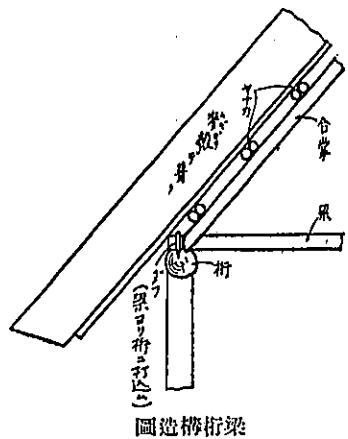
取間宅氏郎五政音大

圖版第十一、第十二 前圖と同じく古保利村大音政五郎氏宅であるが、此の家は

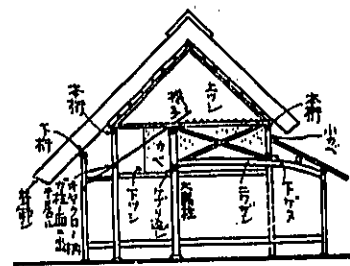
小間入りになつて居る以外には前の大音忠太夫氏の間取りと殆んど變らない。間取の關係が中柱を中心として、前の例と左右反對になつて居るが普請が稍劣るのみで構造其他同様である。

圖版第十三 近江國は東海道米原附

近より南は間取構造共に北部と違つて居る事は概観で説明した通りである。

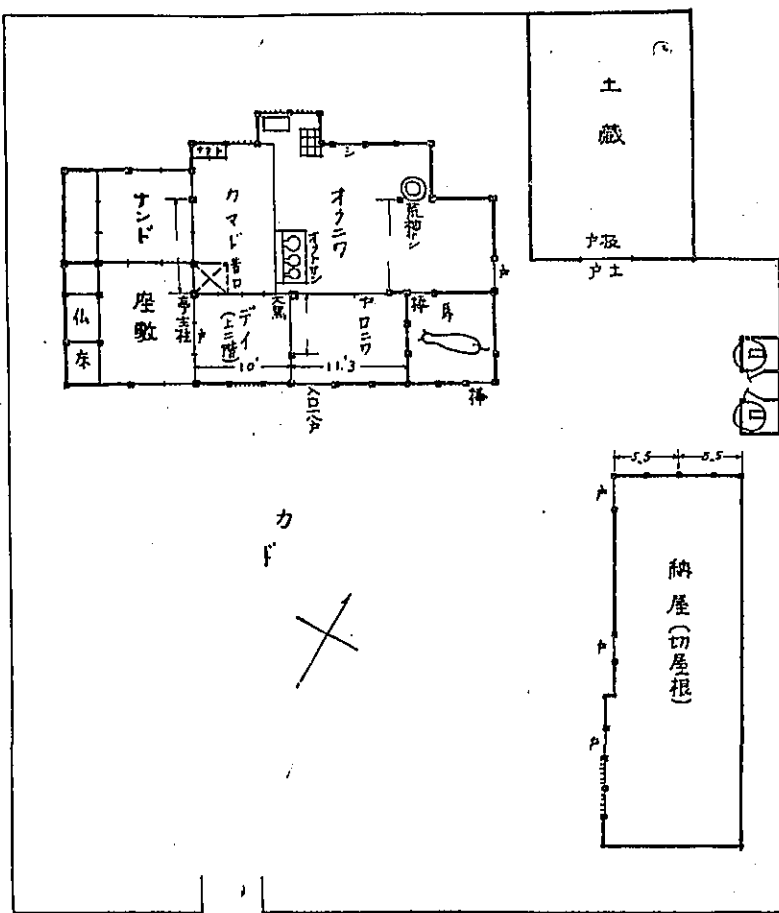


圖版第十三



(匠位の柱黒大)圖面斷横

犬上 郡多 賀村 には 官弊 大社 多賀 神社が あり、又同村 の敏満寺に は昔八百八坊があつた土地であるが今日はその敷地跡に昔の面影を偲ぶ計りである。此の圖は同村字敏満寺の部落の樋口利八氏の宅で縦喰違の四間であるが、此の四間住ひの事を四ツ住ひと云つて居る。此の様な縦の喰違の間取が古い形式であることは中國や四國の例

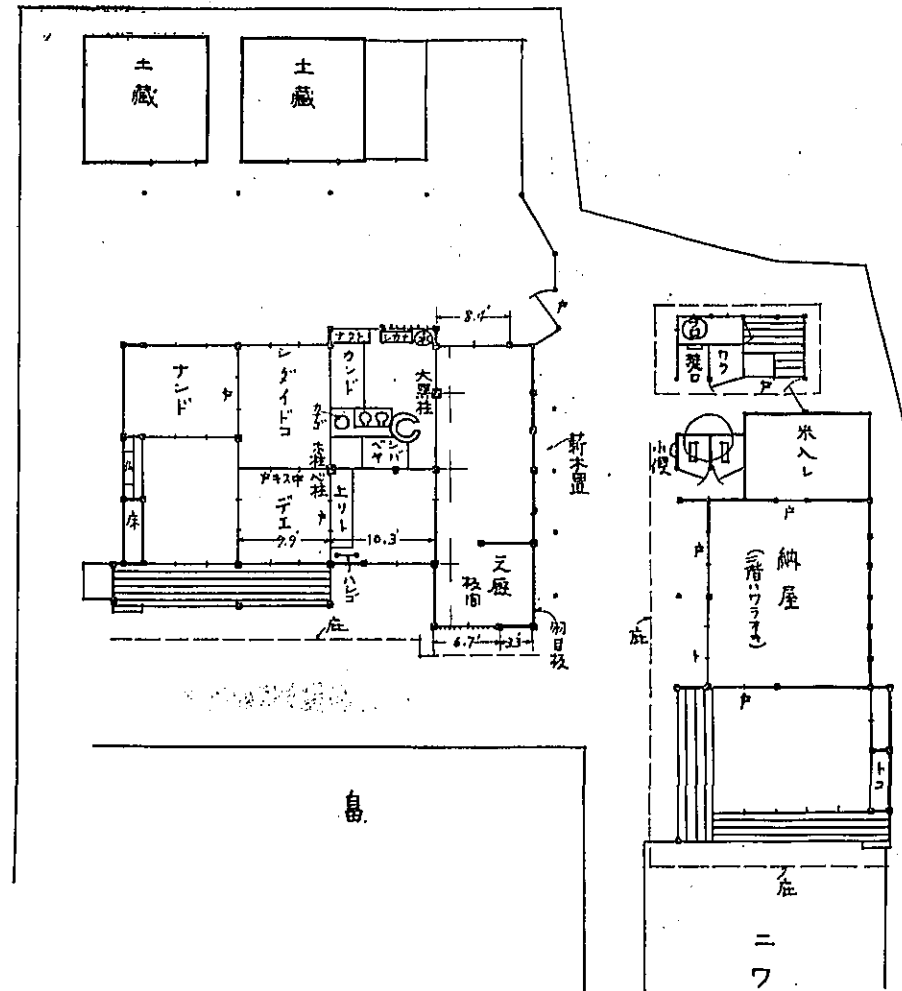


取間に並地宅氏八利口樋

で説明した通りである。此の地方でも新しい家は整型の四間取りにするようである。

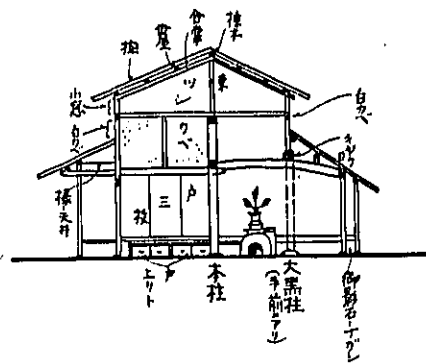
母屋は四方葺卸して棟の兩端には煙出し（破不）が付いて居る。合掌は下端を尖らして桁に突き差してある。梁は合掌とは違つた場所で兩端を桁の上に渡して、上からダブ（ダボの事）を桁に打込んである。是れらの構造は福井縣の例で説明した通りである。其他構造は此の挿繪で示す通りである。又北部の小間入りの間取の中柱がなくなつて、亭主柱と云つて居る。棟は昔カラスオドシを作つたものであるが、今日は巻棟にする様になつた。是れは藁葺の棟を皮で巻いて竹で押える丈けのものである。

圖版第十四 甲賀郡は本縣の最南に位し伊勢と伊賀に接した山地である。圖版第十三は大原村大原兵馬氏の宅であるが間取は前の犬上郡の樋口利八氏のものと同様の四間取の喰違型であるが此の家は瓦葺になつて居る。此の部落は小さな家は草葺である



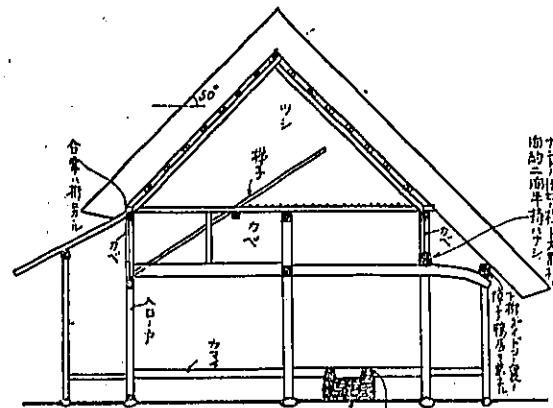
取間に並地宅氏馬兵原大

大原兵馬氏宅横断面圖



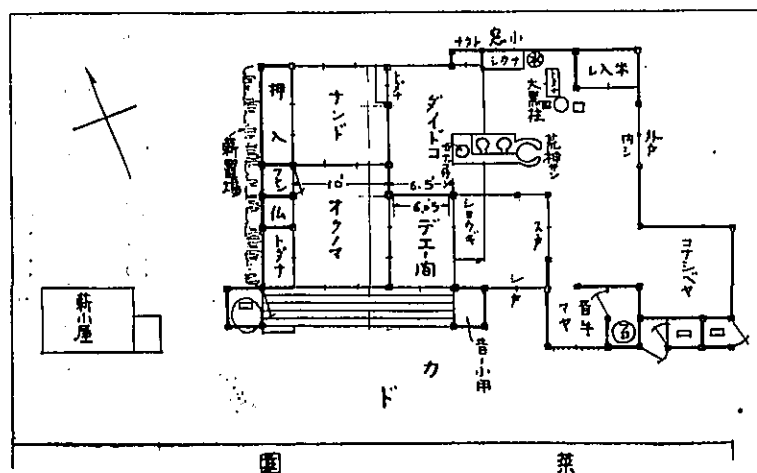
が、少し大きい家は瓦葺にして中二階の様な屋根裏をツシに使つて居る。従つてツシに使用する爲めに中央の本柱の上に丈六尺七寸の束を立て是れに合掌を渡して母屋を受けて居る。此の様な構造は總て葛屋から瓦屋に遷る初期のもので、その過渡期の構造であるが、此の様な例は東海道方面の他の府縣でも多く見る事が出来る。屋根下の外壁は全部大壁にして白漆喰塗に仕上げてあり、又合掌の鼻が軒下に三個所見えるが何れも漆喰を塗つてある。

大黒柱はニワの下手にあり、デニの上りの所にある柱を本柱と云ふて居る。奥ニワから臺所に上る所をカンと云つて居る。



圖面斷横宅氏邊渡

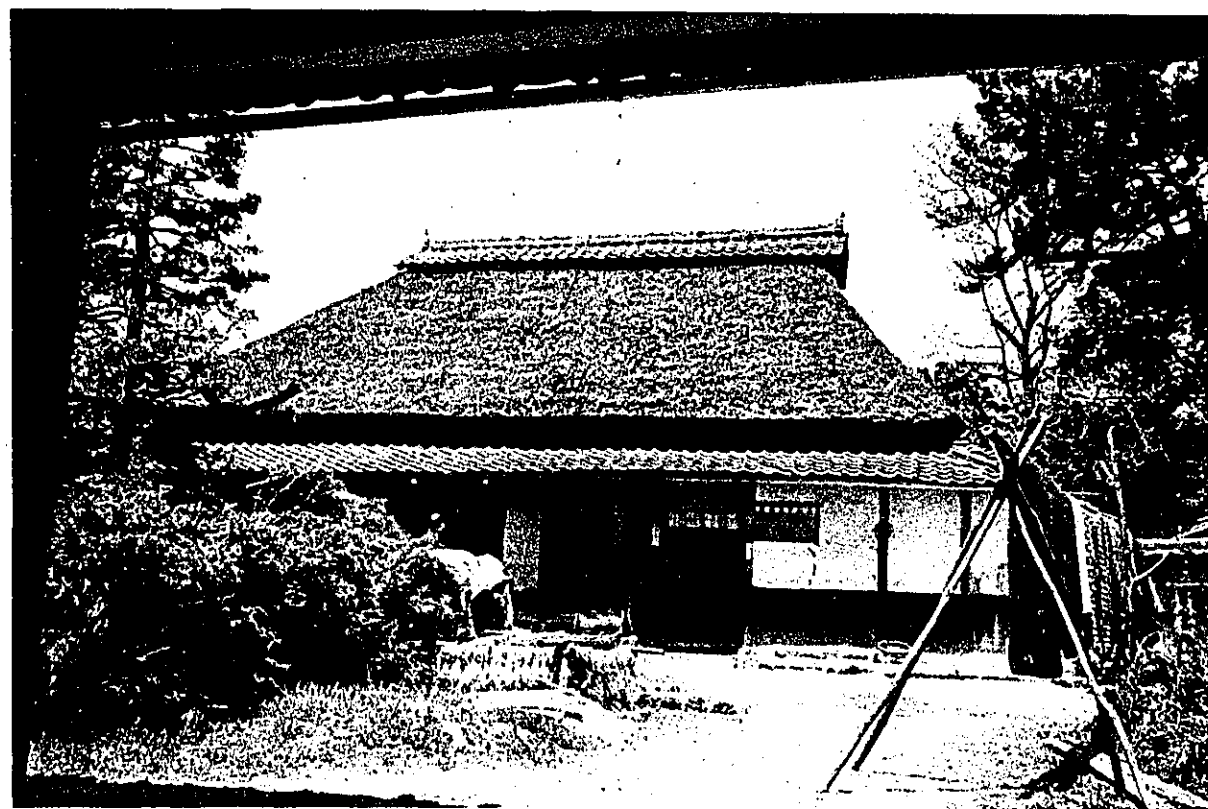
圖版第十五 前圖版と同じく大原村の渡邊國藏氏の宅で間取も前同様四間取の縦喰違型であるが屋根が草葺である。棟には兩端に小さな破不が付いて居るが、少し大きな家で瓦で棟を葺いた所謂箱棟のものと同様



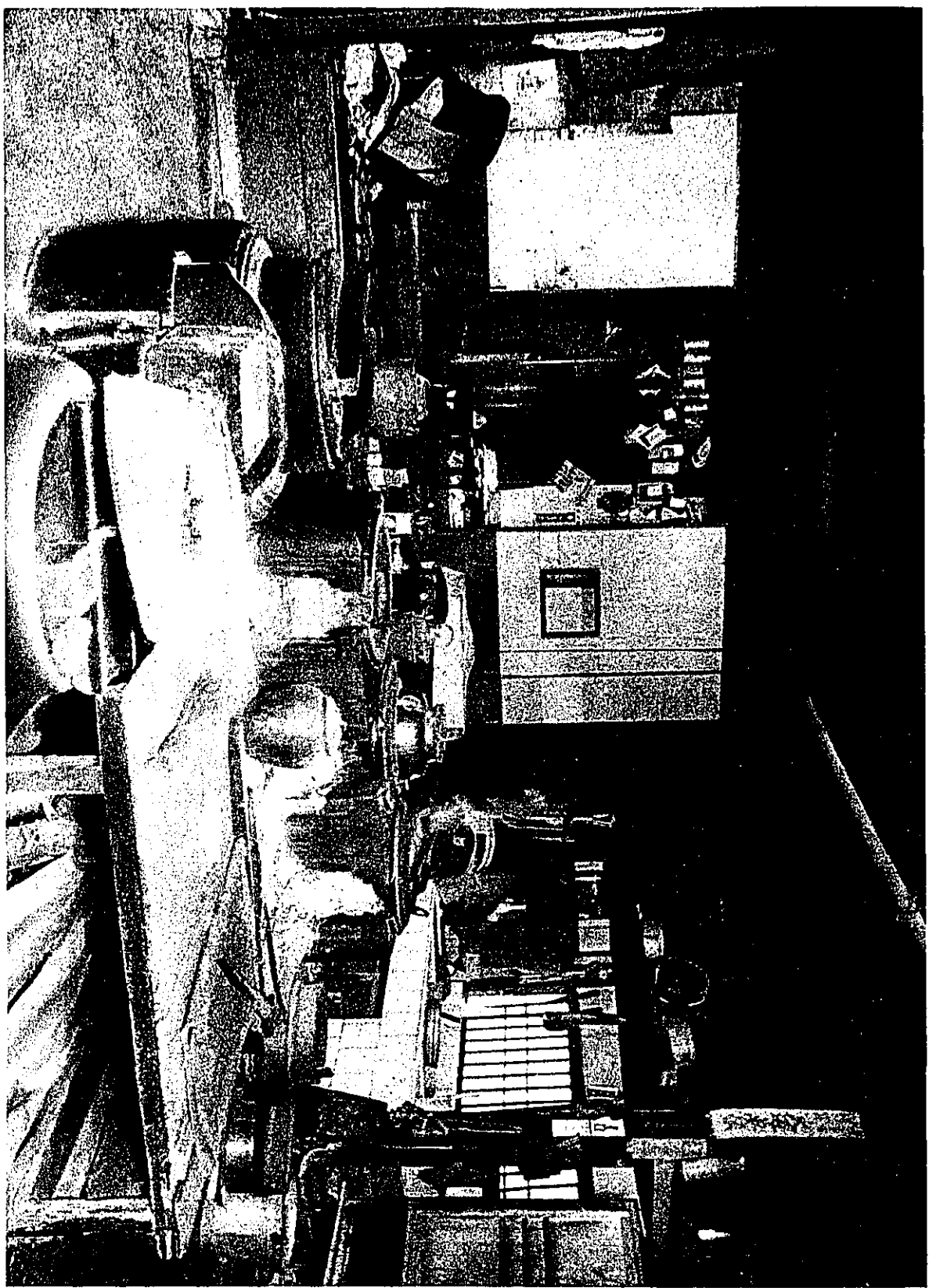
取間に並地宅氏藏國邊渡

に極めて小さなものが附いて居るに過ぎぬ。其他の構造も多賀村の樋口利八氏のものと同様である。
圖版第十五の上圖は同家の全景を示し、下圖は臺所をデエの間から斜に見たもので、ユルリとクドが併列して居つて、その端に荒神さん（大釜）が祭つてある。ユルリにはカナゴサンを置いて是れに鍋が掛けてある。

三重縣



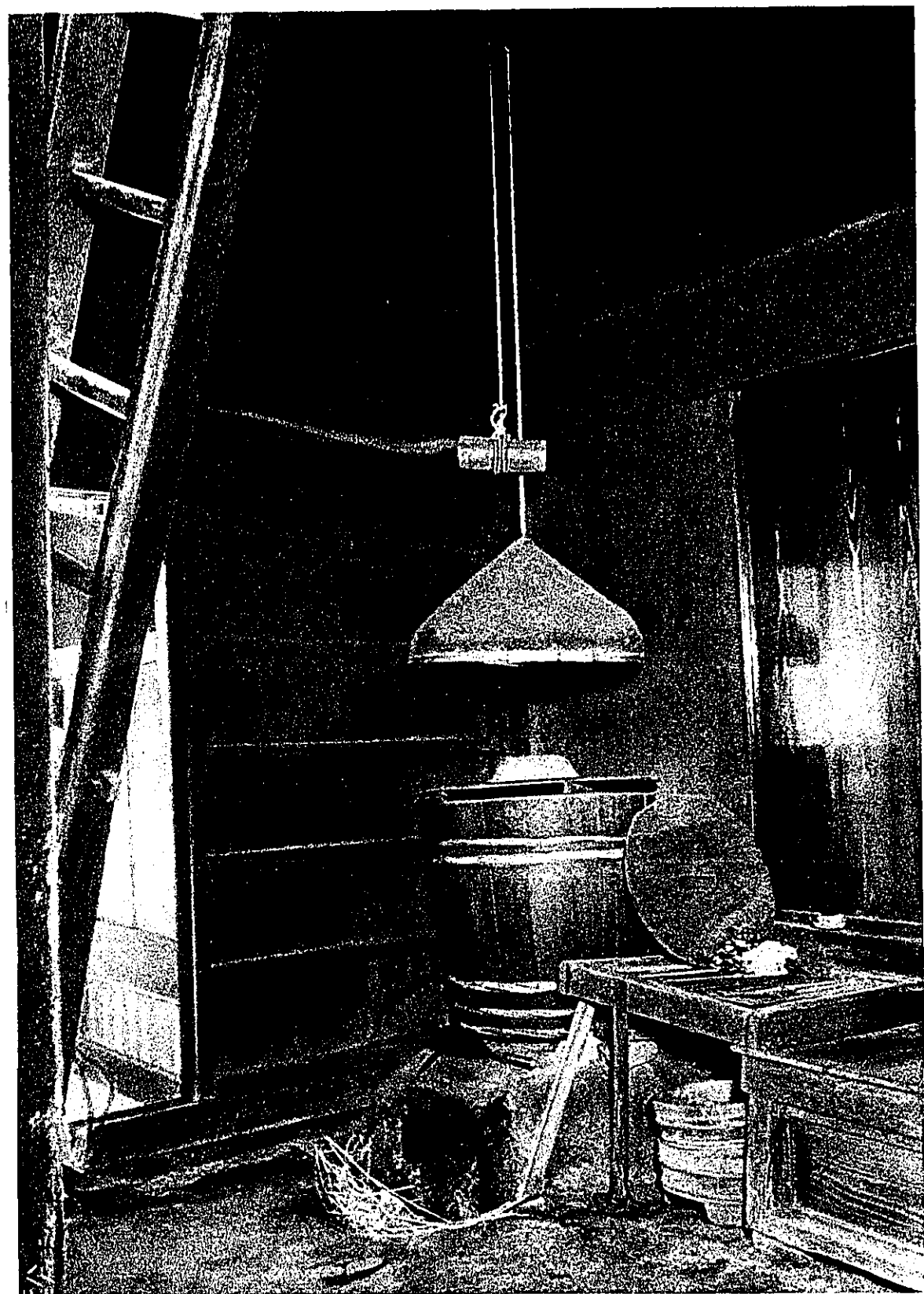
三田村 樋口保蔵氏
16



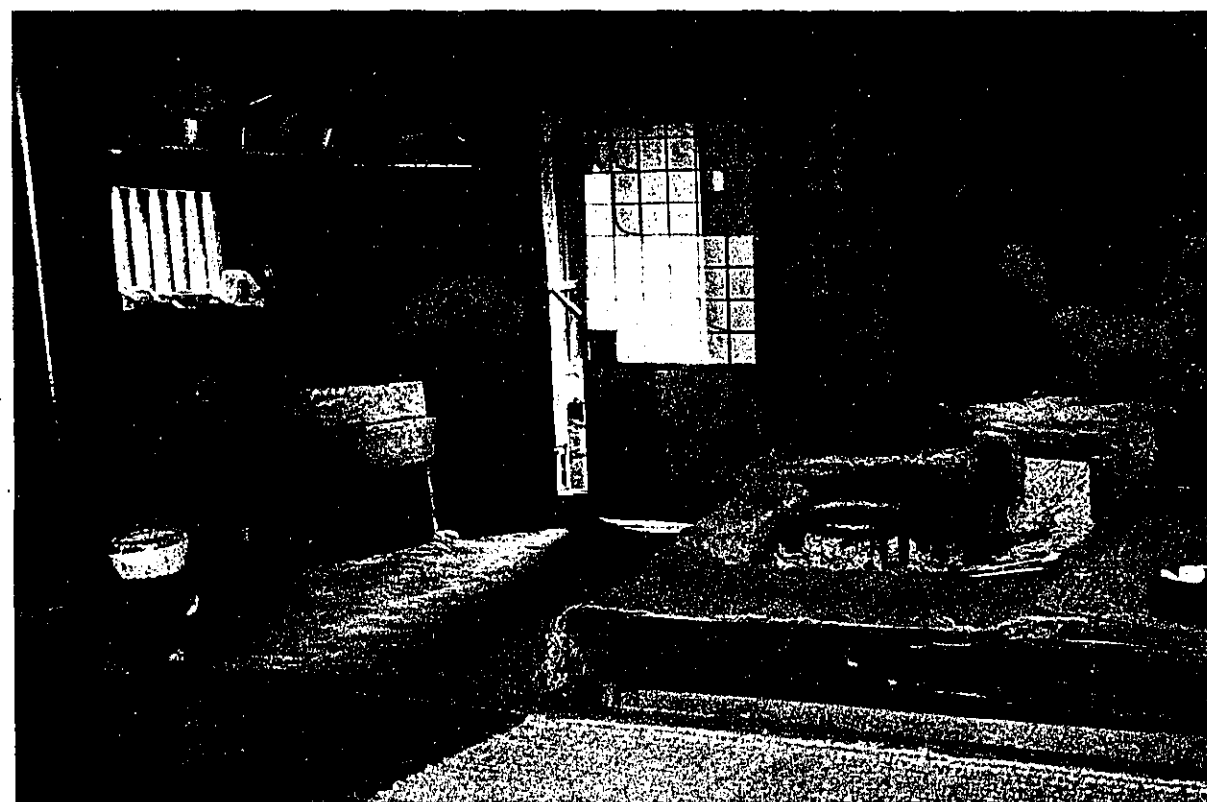
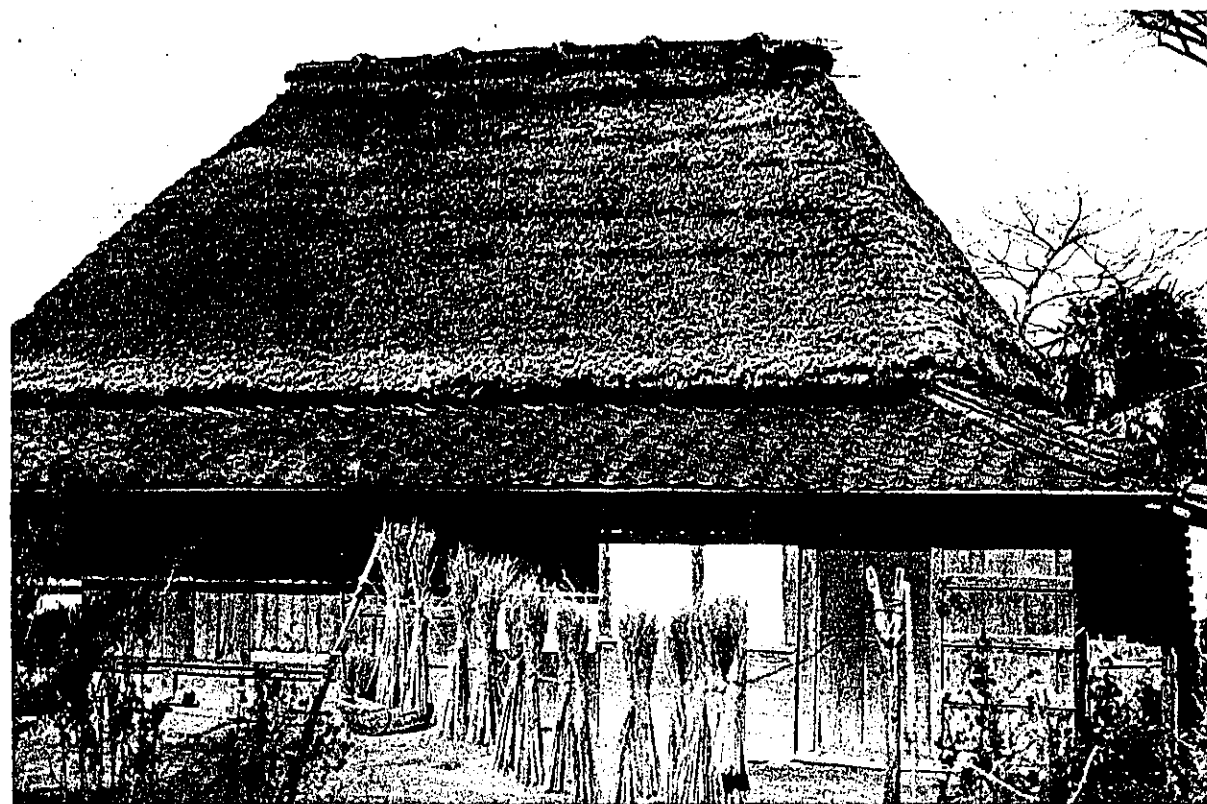
三田村 柳口保藏氏 17



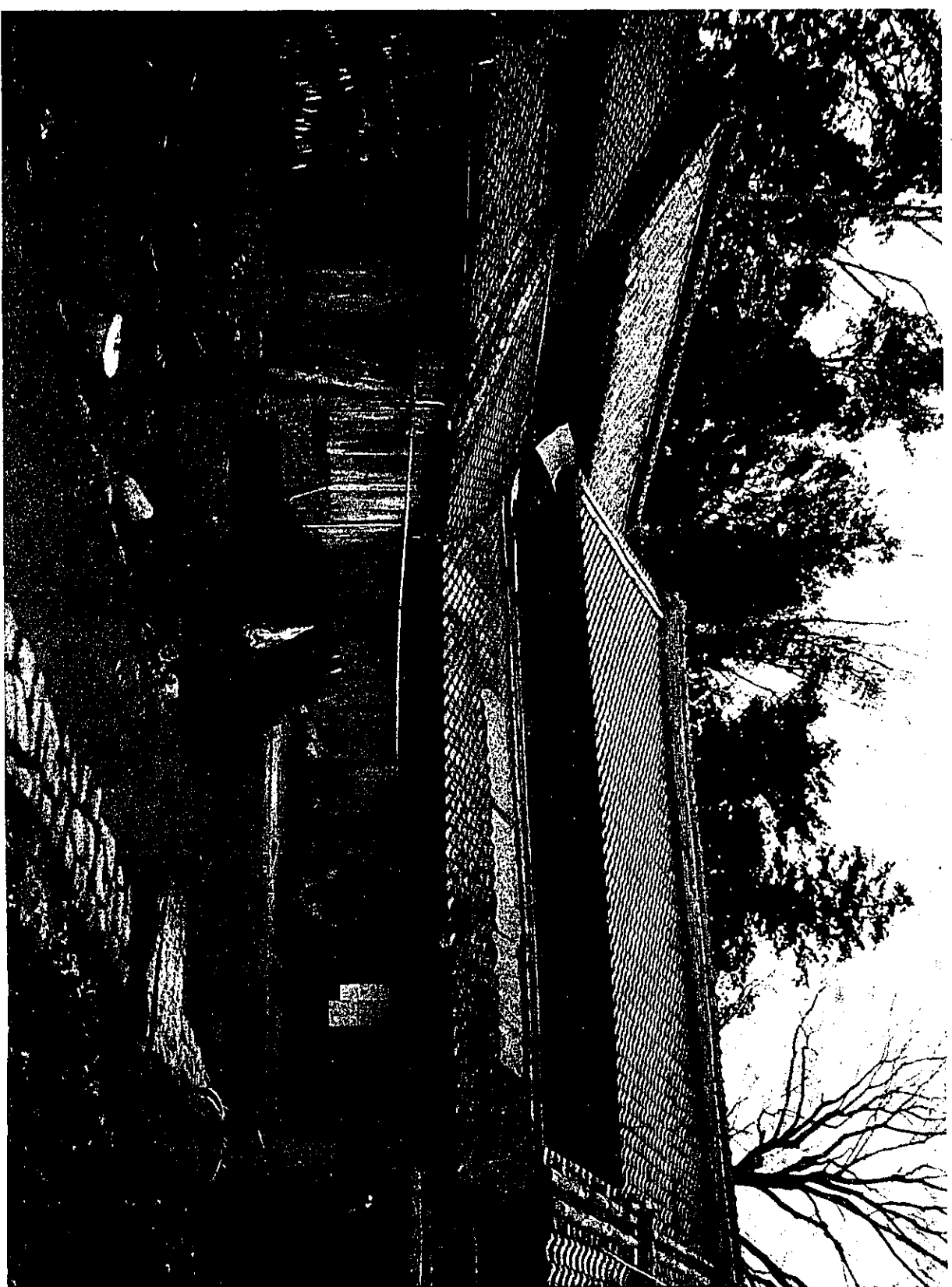
三田村 中尾熊藏氏 18



三田村 中尾熊藏氏 19



津田村 小西作左門氏
20



津田村 中西角兵衛氏